

## 母の心理 (一)

東京女高師教授

牛島義友

## 第一節 母性の両面性

中江藤樹が九歳の時、祖父にあずけられて伊豫の大洲で學問をすることになったが、出立にあたり母は「これ、藤太郎や、學問ができて、お祖父様が、もう歸つてもよいと言われるまでは、決して歸つてはなりません」と固くさとした。ところが翌年冬に母からの手紙で、手にひびやあかぎれができて困っている由を知り、孝心深い彼はじつとしておることができず、藥を求めて、近江の小川村まで母を慰めんと歸省した。その日は大雪の降っている日であつたが、車井戸で水を汲んでいた母は、却つて彼をとがめ、何故學問の途中で歸つてきたかと叱り、心を鬼にしてその日の中に大洲へ追い歸してしまつたと傳えられている。

元峰禪師が幼時修業のため入山するにあたり、「こんど寺へ戻つたら、偉い人になれなければ、死んでも歸つてきません」とけなげな覺悟を語つた。すると母は「偉いお坊さんになれたら、歸つてこなくてもよいが、若し偉いお坊さんになれなかつたら、心配することはない、いつでもお母さんの所へ歸つておいで」とやさしくいきかせたという。

この心を鬼にしてまで子供を激勵する母と、失意の子を暖かく懐いてくれる母とは同じ母である。母にはこの二つの面がある。子供を愛撫し、いつまでも手元において可愛がり、凡ゆる危険から保護してやりたいのは親の本能である。盲目的といわれるほど子供を愛し、子供が病めば無精に心配し、よい成績をもらつてくれれば子供と共に喜ぶのは親の本性である。しかしこの親は同時に自分の愛情に溺れるだけでなくは

親として、教育者として、子供の完成を祈り、そのために、厳しく躰け、誤りを許さず、激勵、鞭撻をも辭せない反面がある。この慈父、慈母の面と嚴父、嚴母の面が同じ親の中に含まれている。この二つの面のつり合ひは、人によつて夫々相違し、餘り賢明ではない盲目的愛に生きる母もあろうし、愛情を外に表すことを殊さらにきらふ嚴父もいるかもしれない。しかし子供のためを思わない母はいないし、心の中まで冷徹な父もない。凡ての親にはこの二面があるし、この二つの面から考察しないかぎり親の態度を正しく理解することはできない。

又この親の両面性は父と母とではその現れ方が異なるかもしれない。一般に母には慈母的性格が強く、父には嚴父的性格が多いかもしれない。従つて女に於ては反對に賢母の徳が特別に表彰され、純情な父性愛に生きる父は特に物語りの主題にも選ばれてくる。又民族や社會の相違によつて慈父慈母の面を強く表すものもあるし、日本人などは特にこの面を抑えて、賢母、嚴父たることが強調されているかもしれない。封建、軍國の社會に於ては軍國の母が特に要求されている。

又慈父、慈母の面はいはゞ親の本能であつて、凡ての動物に共通に具わつてゐる性格であるが、賢母、嚴父の面は社會的に育成されたものであり、文化の進んだ民族に特に形成されてくる性質と考へることもできよう。動物には親の本能としての子供への保護や愛情は強く表れるが、意識的努力による賢明な親の態度はみられない。

なほこの二つの面は互に調和するものではなく、寧ろ表面的には相反し矛盾するものである。子供の教育、鞭撻のためには感情を殺し、心を鬼にする必要も起るし、封建の母は涙をかくして、子供を死地に送らねばならなかつた。したがつて親の生活、母の生きる道は常にこの二つの態度の葛藤、相刻であるといえよう。この人生の矛盾を正しく止揚し得た人こそ優れた人であり、賢母と稱えられる人である。従つてこの両面から親をみることは、生ける人生、闘える母の姿をながめることとなる。

## 第二節 慈母の面

可愛らしい子供をみると誰でも愛情を感じる。特に若い女人達にはこのかわいゝといふ感情が強く湧くらしい。しかしこのかわいゝといふ感情と親の愛情とは本質的に相違する。もとより親の愛情の中に、この子供に對するかわいゝとの感情、頬ずりしたいような目の中に入れても痛くないといふような感情も含まれる。しかしこれだけが親の愛情の本質ではない。

人々の懐くこのかわいゝとの感情はかわいらしい子供をみると起るが、かわいくない子供、きたならしいなりをした子供や、おできのできた子供、性質のひねくれた子供、不良兒や低能兒に對しては起らず、寧ろにくらしいとか、不快な感情が起るであらう。ところが、親となると、おできで苦しん

でいる幼児は一そうかわいそうな感じが起るし、自分の不良な子供に對してはたえず心を惱まし、低能な子供に對しては一層不憫になる。親の愛情はかゝる不幸な子供に對して一層強く觸發されるものである。

而してかゝる不幸な子供に對して感じる親の感情はいはゆるかわいゝ感情とは全然異なる。氣になつてしかたがない、心配でたまらないといふ感情が主調となつてゐる。又普通の子供を親が育てる場合にいつもかわいゝと感ずる譯ではない。初めてできた赤ん坊や末子などに對してはかわいゝといふ氣持が非常に強いが、大きくなつて言うことをきかなかつたり、反抗したり、或は子供が多勢になつた場合には、かわいゝとの感じよりも、煩らわしい、うるさいという感じさえ起る。うるさくて怒鳴ることも起るし、心から腹立たしく感ずるところとどつてある。即ち親の子供に對する感情は常にかわいらしいとの情愛を経験してゐるわけではない。しかしこんな子供に對しても少し離れてゐると心配でしかたがないものである。傍にゐる時には叱つてばかりゐる子供も離れてゐると氣になるし、病氣にでもなると、すぐ最悪の場合を想像して心配する。いうことをきかない子供に對しては、こんなことで將來どうなるであらうかと氣になつてしかたがないものである。これが即ち親の感情であり、親心の本態である。即ち親の感情は子供に對する配慮、心配こそが本質的なものである。而してかゝる配慮 (Flinch) は親のみが持つもので、他人の子供に對しては普通は現れない。只特別な保姆や教師

などでかかる氣持まで持つことがあるが、普通の人が他人の子供に對してもてるものではない。

子供を育てることはたのしいことだといはれるか、たのしいといふことは苦勞のゐることであり、絶えざる苦心である。而も單なる苦勞と異なる。苦勞なら避けたいと思ふものであるし、苦勞の種がなくなればほつととするものである。しかし子供のための苦勞はいやいやするのではなく、苦勞してゐる時に親は寧ろ生甲斐を感じるのである。この子供が取上げられると親は全く生活の目標を見失つてしまふ。どんな不出来な不幸な子供であつても、その子が瘦くなる親はほつとするとどこか、がっかりしてしまふ。したがつてこの子供に對する配慮、心配は單なる心配の氣持と異り、親の心に植付けられた運命的な感情であり、取去ることのできな重荷であり、この重荷を擔つてゐる時だけ人は人間らしい生活を感ずるようなものである。

かゝる意味で親の愛情は親の中に運命付けられた本能的な感情といふこともできよう。即ちこれは親のみが持ち、又親としてはこの配慮から解放されることが許されない感情であるといえよう。而してこの情緒は單に快、不快と片付けることのできな、更に深い生活體驗あり、生命の根底に觸れた感情である。

以上の感情は母親のみの持つものではなく、父親も親として共通に感じる感情である。しかし母性愛の本質も要するにこの點に歸すると考えられよう。

子供を育てるのはかわいゝとか、かわいくないといふ感じとは異ると或母はいつておる。村岡花子氏は「母の愛は絶えず子供のために憂ひ、痛む愛である。こまやかに動き、ひそかに思ひを潜める愛情である」といつているが、この氣持をいい現したるものと思う。

かかる意味の子供への愛情は理性や理論ででき上つたり、左右されるようなものではない。いはゞ本能的に凡ての母に附與されるものである。教養の高い母にも、無教育の母にも等しく懷かれる感情であり、一度この感情を経た上でなければ賢明なる母親もおれない。

母性の究極は餘りにあるがまゝのものである。そこには批判もなければ思考もない。ただ子供を愛する一念があるばかりである。これを本能愛、盲目愛と一口にいづてしまへば、今日何等近代的批判に値いしない如く考へられ易い。けれども母性は賢はこゝまで到達しえて、始めて賢き理性の母親にたしかえりうるのである。鷹野つき著「子供と母の傾分」五一頁

アンナ・カレニナの中で、別れた母親が子供に遇ひにゆくりが描かれてあるが、「眞に迫つていて、私などには單に通俗愛などといつてすましてはいられない氣がする」と或母親はいふ。即ち彼女は戀愛のために、いつたんは子供を棄てたが、實はその母性をまで棄てたわけではなかつた。

彼女は日毎毎に子供を思い、そして堪えかねて密かに遇ひにゆく……。本當ならばこれを理窟でいえば愚かしい話である。その位ならば何故最初から子供を棄てたかということになる。鷹野つき著「子供と母の傾分」一七八頁

過去の賢母も近代的解放された女も母である限りこの感情から解放されることはできないのである。若い頃に色々と夢み、人間として生きる道は單に母としての道だけではなく、もつと別の生き方があつてよい筈だと論じ合つた人々でも、母となり、年をとるに従つて道を歩いて子供のものばかり目につくといつた場合に子供中心に生きるように變り、時に反省して思はず苦笑するようになるであらう。しかしかく母になりきつてゐる姿は人間としての退化であり、女の弱點であるといふよりも、母としての新たな喜びである。若い頃には生活の喜びといへば、音楽、映畫、着物と生活以外の處に、或は生活の藝術的な部分にのみみていた譯であるが、母となつてはもつと現實的な生活自身の中にみいだすようになり、この場合子供を中心とした楽しい家庭生活こそが、最も楽しい母の慰安處となつてくる。

さきごろも座談會がひらかれたが、そこに列席した私ども三人の女性が期せずして一致したことは、おしなべて婦人にとつては、「生活の楽しみは外部に求めるものではなくて、家庭生活の中から自然に湧きだしてくるといふことであつ

た。

家庭の慰安は、「慰安設備」に依つて得られるものではなくて、慰安の雰圍氣を家庭自體が持つことによつて得られる。いひ古された言葉だけれど「狭いながらも楽しい我が家」とはこの間の消息をよくあらわしてゐる。村岡花子著『母心抄』五〇頁—五一頁

この子供中心に生き、理性や理窟を超越してひたむきに子供を愛したいとの感情は凡ての母親の本心である。岡本かの子氏は激情の女性であるが、母としての感情をも誰に遠慮することもなく奔流させている。「母子敍情」なる創作はバリで畫の研究をされた自分の愛兒への想ひを、情的に表現し、創作化したものと思ふ或日銀座を散歩していたら、自分の息子にそつくりな青年をみつけれも女の跡をつける不良青年のように、この青年の跡をつけることから話は始つてゐる。やがてこの青年との交渉が始まり、成熟した母性と若き青年との心的交渉や戀愛と全く異つた母子情による交渉がつつられてゐる。

彼女が子供を育てるに當つては所謂賢母振りは示さず、只切實な愛情に訴へて育てた。叱責や苛酷な教育によるよりも愛情の迫力によつて人間の魂を目覚めさせた。成長し既に外國に留學している息子に對しても、矢張り幼兒に對するような細かな心づかひが起る。

「あの子は相變らず身體は小さい方でせうか」

すると氏は、やつぱり女親は女親だといふ風にみやつて、ご心配なさるな、イチロはもうあなたのお考へになつてゐるような子供さんではありません。逞しい立派な青年です」

もしさうならばと、かの女はまた心配になつた。今度逢つた時、取り付きにくくはあまるまいか、はにかむやうな想ひをさせられはしないか。しかしすぐかの女は、やつぱり自分の求める通りむす子に踏み込めばいい、あの子はあの子であることに絶對に變りはないと、すぐ自信を取り戻した。岡本かの子著『母子敍情』二二頁

この感情は凡ての母の氣持を表したものであろう。子供が成長し完成してゆくといふことは親には喜びであり、又悲しみである。自分から離れてゆくものを聞く抱きしめておきたい感情にかられる。又彼女は成長した逞しい息子をいつまでも抱きしめることのできた母であつた。(第二節つづく)